

演題名：と畜場で見られた牛の腸炎について

発表者氏名：金谷 安利 河村 裕江 石川 喜代子 並河 孝至

発表者所属：滋賀県食肉衛生検査所

1. はじめに：

2014年9月以降、S食肉センターに一般畜として搬入・と畜解体された牛で、解体後検査の内臓検査において腸炎と診断され小腸または大腸が廃棄となる事案が多発した。

今回、腸炎となった病変部の病理学的検索を行い、また、小腸または大腸の廃棄率の推移を調べたので報告する。

2. 材料および方法：

(1) 病理検査

ア. 材料：小腸5検体および盲腸2検体（小腸炎、大腸炎と診断され廃棄となったもの）

イ. 方法：小腸および盲腸について、ホルマリン固定後ブロックを作成、パラフィン包埋後、HE染色を行った。

(2) 廃棄率の推移調査

ア. 対象：2014年4月～12月にS食肉センターに一般畜として搬入、と畜された牛

イ. 項目：月別・種類別（ホルスタイン、交雑種、黒毛和種）の小腸および大腸廃棄率
月別・農家別の小腸（空腸、回腸）および大腸（盲腸、結腸、直腸）廃棄率

3. 成績：

(1) 病理検査

ア. 肉眼所見

(ア) 小腸：粘膜面が全体に紅潮し、腸管壁が肥厚していた。

(イ) 盲腸：広範囲にまたがる点状～斑状の出血を認め、腸管壁が肥厚していた。

イ. 組織所見：

(ア) 小腸：粘膜固有層に赤血球、リンパ球および好酸球の浸潤、線維芽細胞の増生を認めた。

(イ) 盲腸：粘膜固有層に赤血球およびリンパ球の浸潤、線維芽細胞の増生を認めた。

(2) 廃棄率の推移

ア. 小腸の廃棄率：

(ア) ホルスタイン：廃棄率は34%で最も高かった。ピークは11月で56%であった。ホルスタイン種の小腸では全部廃棄になることが多かった。

(イ) 交雑種：廃棄率は28%で2番目に高かった。ピークは11月で43%であった。交雑種の小腸では、10月までは全部廃棄は多くなかったが、11月には全部廃棄が増加した。

(ウ) 黒毛和種：廃棄率は19%で最も低かった。ピークは11月で29%であった。黒毛和種の小腸は、一部廃棄であることが多かった。

イ. 大腸の廃棄率：

(ア) ホルスタイン：廃棄率は34%で最も高かった。ピークは10月で53%であった。

(イ) 交雑種：廃棄率は32%で2番目に高かった。ピークは10月で58%であった。

(ウ) 黒毛和種：廃棄率は21%で最も低かった。ピークは11月で29%であった。

4. 結論

病理検査の結果、組織診断名は粘膜固有層に好酸球の増加を認める牛の慢性腸炎とした。好酸球の増加は一般的には寄生虫の関与などが疑われる。他時期に比べ、秋に出荷された牛で腸炎による廃棄の増加を認めた。以前にも季節的な廃棄率の上昇があったのかは、今後、過去のデータを広く確認していく必要がある。今回腸炎と診断された個体については、生体検査において消瘦や発育不良、血便等の異常は認められていなかった。腸炎の発生要因については、寄生虫や病原微生物、代謝機能やその飼育環境だけでなく、と畜場への運搬、係留中、追い込み時のストレスなど考慮すべき点は多い。今後は家畜保健衛生所や臨床獣医師と連携して、原因を考えていきたい。